

クレジット:

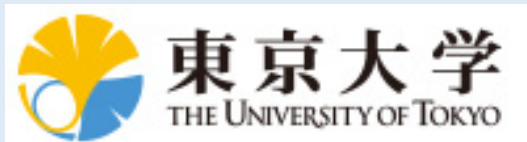
UTokyo Online Education 東京大学朝日講座 2017 鈴木 泉

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限って、特に記載のない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下で利用することができます。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



必然主義の哲学

—スピノザと共にあまりに人間的な偶然性概念を消去しよう—

鈴木 泉

2017年度東京大学朝日講座「＜偶然＞という回路」

2017年11月29日

東京大学文学部

様相概念としての偶然性

- 様相 (modality) 概念

- 可能 (possible) : 存在することが可能である (possible esse)
- 不可能 (impossible) : 存在することが可能でない (non possibile esse)
- 偶然性 (contingence) : 存在しないことが可能である (possible non esse)
- 必然性 (nécessité) : 存在しないことが可能でない (non possibile non esse)

→ 偶然性と必然性の対立

- 偶然性 (contingence) と « le hasard » の区別。(差し当たり、ここで扱うのは前者。)

九鬼周造と偶然性概念

九鬼周造『偶然性の問題』、岩波書店、1935年(岩波文庫、2012年)。引用頁数は1935年版による。
——「偶然と運命」『九鬼周造随筆集』、岩波文庫、1991年。

- 必然性の三様態と偶然性の三様態

1. 定言的必然 vs 定言的偶然←概念と徴表: 稀有 (rareté)、本質的でないもの
何か稀にしかないこと=遭いにくいこと: 工場の勤め人が工場から離れた町で遭う
2. 仮説的必然 vs 仮説的偶然←理由と帰結: 遭遇 (rencontre)、原因をもたないもの
何かと何かとが遭う: 病人の見舞いにおいて見舞いに来た誰かに会う
3. 離接的必然 vs 離接的偶然←全体と部分: 一つの可能 (un possible)、法則的でないもの
何かあることもないこともできる: サイコロの目の出方

「あることもないこともできるようなもの、それがめったにないものならばなお目立ってくるわけではありますが、そういうものがヒョッコリ現実面へと廻り合わせると、それが偶然なのであります。」(「偶然と運命」、上掲書、78頁)

(九鬼周造における)偶然性概念の意義(1)

- 「我々はこの世界の中に何等か統計学と「必然性」以外のものを発見しようという希望を棄てることを欲しない人たち」に属する」(『偶然性の問題』、5頁)
 - 1. 「個物および個々の事象」(同書、321頁)
 - 2. 「一の系列と他の系列との邂逅」(同書、321頁)、「この場所での、この瞬間での邂逅」(同書、322頁)
 - 3. 「不可能性の無の性格を帯びた現実」(同書、322~323頁)、「単なる現実として戯れの如く現在の瞬間に現象する。現在の「今」現象した離接肢の現実性の背景に無を目撃して驚異するのが偶然である」(同書、323頁)
- ←「一者としての必然性に対する他者の措定」(同書、324頁、強調は引用者)

(九鬼周造における)偶然性概念の意義(2)

- 「偶然性は学的認識に対して限界を形成している」(同書、326頁)
- 「必然と偶然とを不可分離の相関に於て接触せしめることは、生の論理学へ邁進する理論的実存にとって公理的要求でなければならない。」(同書、327頁、強調は引用者)
- 「偶然性の実践的内面化は具体的全体に於ける無数の部分と部分との間柄の自覚にほかならない」(同書、328頁、強調は引用者)

スピノザの必然主義

- 「神の本性の必然性から無限に多くのものが無限に多くの仕方(言い換えれば、無限の知性によって把握され得る全てのものが)帰結しなければならない」(『エチカ』第一部、定理16)
- 「自然の内には一つとして偶然なものはなく、全ては一定の仕方(言い換えれば、無限の知性によって)で実在し、作用するように神の本性の必然性から決定されている」(『エチカ』第一部、定理29)
- 「事物は現に産出されているのとは異なっただけの仕方、いかなる他の秩序によっても神から産出されることは出来なかった」(『エチカ』第一部、定理33)
- 「こうして私は、事物自身の中にはその事物を偶然であると言わしめるような何ものをも絶対に実在しないことを十分に明白に示したから、ここで私は、偶然ということによって何が知解されるべきであるかということを手短かに説明しよう。[.....]或る事物が偶然と呼ばれるのは、私たちの認識の欠如に関連してのみであって、それ以外のいかなる理由によるものでもない。すなわち、その本質が矛盾を含むことを私たちが知らないような事物、或いは、その事物が何の矛盾も含まないことを私たちがよく知っていても、その原因の秩序が私たちに分からないためにその事物の本質について何事も確実に主張し得ないような事物、そうした事物は私たちに必然であるとも不可能であるとも思われないので、したがって、そうした事物を私たちは偶然とか可能とか呼ぶのである。」(『エチカ』第一部、定理33備考1)

必然主義の帰結(1)

- 擬人的な目的原因概念の消去

- 「人間は万事を目的のために、すなわち彼らの欲求する利益のために行う。この結果として、彼らは出来上がった物事について常に目的原因のみを知ろうと務め、これを聞けば満足する。[.....]しかし、自然が何ら無駄なこと(言い換えれば、人間の役に立たぬこと)をしないことを示そうと試みながら、彼らは、自然と神々々が人間と同様に狂っていることを示したに過ぎないように思われる。見るがいい、事態はついにいかなる結末になったかを。自然におけるかくも多くの有用物の間に混じって少なからぬ有害物を、例えば、暴風雨・地震・病気などを彼らは発見しなければならなかった。そこで、こうした事柄は神々が人間の加えた侮辱の故に、或いは、敬神に際して人間の犯した過失の故に怒ったから生じたのだと信じた。」(『エチカ』第一部、付録、強調は引用者。)

必然主義の帰結(2)

- 人間中心主義の否定

- 「もし万物が神の最完全な本性の必然性から生じたとするなら、、自然におけるあれほど多くの不完全性は一体どこから生じたのか。例えば、悪臭を発するに至るまでのものの腐敗、嘔吐を催させるような事物の醜さ、混乱、害悪、罪過などはどうか、と。しかし、既に言ったように、これを論駁することは容易である。何故なら、事物の完全性は単に事物の本性ならびに力能によってのみ評価されるべきであって、したがって、事物は人間の感覚を喜ばせ、或いは悩ますからといって、また、人間の本性に適合し、或いはそれに反撥するからといって、その故に完全性の度合いを増減しはしないからである。」(『エチカ』第一部、付録)

九鬼の偶然性概念との対質

1. 「個物および個々の事象」(『偶然性の問題』、321頁) vs 個物の自己組織化(cf. 『エチカ』第二部、「物体の小論」)
 2. 「一の系列と他の系列との邂逅」(同書、321頁)、「この場所での、この瞬間での邂逅」(同書、322頁) vs 因果性全体の全体論と永遠性(cf. 『エチカ』第五部、定理23)
 3. 「不可能性の無の性格を帯びた現実」(同書、322~323頁)、「単なる現実として戯れの如く現在の瞬間に現象する。現在の「今」現象した離接肢の現実性の背景に無を目撃して驚異するのが偶然である」(同書、323頁) vs 可能性概念の消去(『エチカ』第四部、定義4、「私たちが、個物がそこから産出されねばならない原因に注意する場合、その原因がそれを産出するように決定されているか否かを知らない限り、私は、その同じ個物を可能的であると呼ぶ」)
- ←「一者としての必然性に対する他者の措定」(同書、324頁、強調は引用者)

必然主義による偶然性概念の消去の意義

1. 神＝自然のごく一部を占めるに過ぎない人間的個体の優位の拒否と自由意志の否定
2. 因果の総体を見渡すことの出来ない、「間」においてしか存在し得ない人間的個体の位置づけ
3. 可能性概念の消去と無様相の哲学
 - ・ Cf. ライプニッツの可能世界論との対比
 - ・ 可能性概念と偶然性概念とを欠く「のっぺりとした」自然の総体

→「一者としての必然性に対する他者の措定」ではなく、必然的な一者における内在的な個体の触発関係

しかし、私たちは、確固とした個体も自由意志も不在で、因果の決定の作用の只中で自らを形成しては消滅していく個体の流動状態のみから成立している世界のありように耐えつつ生を営むことが出来るか？偶然性(contingence)とは異なる、le hasard=chanceからなる成立する世界とはどのようなものか？